

待て、暫し！

ドイツ語教材開発

Wait, then !

A New Approach to the Development of German-Teaching Materials

八木 博^{*}, 橋本 不二男^{**}, 工藤 眞一^{**},
YAGI Hiroshi, HASHIMOTO Fujio, KUDOH Shinichi,
前田 智^{**}, 野口 健^{**}
MAEDA Satoshi, NOGUCHI Takeshi

概要：学期完結制度における初級ドイツ語教材の開発に関連して、安易に項目を省略するのではなく、最低限必要な文法事項を取り上げることが必要であるとの観点に立って、個々の文法事項の間違い易い項目における、効果的な説明の方法について論及した。

未習外国語の習得には、既習外国語の知識を積極的に活用することの必要性について触れ、また、語学の学習は、究極的には多文化理解であることについても言及した。

キーワード：未習外国語，既習外国語，多文化理解

・緒言

カリキュラム改編に伴い、従来、通年で行われていた語学の授業も、他のすべての科目と足並みを揃えて、学期完結に改められ、それに適した教材の開発が求められている。

そこで、学期完結の授業に合致したドイツ語教材について研究するに当たって、90分授業で15回の授業の内、最初の授業をオリエンテーション、最後の授業を総括に宛て、試験に1回、そして2回を自由時間として活用し、残り10回におけるドイツ語の授業の為の教材の研究に的を絞ることにした。それに伴い、教科書全体を10課に分け、各課の構成については、初級文法の知識の習得に主眼を置いた上で、その課の文法事項と関連のある、平易な文章でありながら、内容的にも学生たちの関心に十分応え得るような読み物を添えることとした。読み物については、ドイツ全般が概観でき、一貫性があるものという見地から、ドイツの16州を10課に振り分けて、説明することとした。それによって、簡単ながら、各州の特色を探り、そこに暮らす人々の姿を通して、多文化理解、ひいては、生きることの意義を考えるための糧になることを意図している。

本稿では、実際に、ドイツ語の教材を作成する中で、従来とは異なる、学期完結制度における教材のあり方を巡って、考察するものである。

*国際文化講座

**非常勤講師

・対象と方法

1. 動詞の現在人称変化⁽¹⁾について

授業の初めにアルファベットを学ぶ際に、併せて、ドイツ語特有の音節の発音練習を課すことが慣習になっているが、それは言語を実態のない無機質なものを感じさせてしまう恐れがあり、そのために、発音練習は本文を読む際に練習する方が効果的である。

およそ外国語を新たに習得しようとする時、それに対して、なんらかの期待や興味を抱いている筈である。ところが、初歩の段階で既につまづきや戸惑いを覚える場合が多い。その原因の一つとして、新たな知識として与えられる数々の情報を理解する為の足がかりとなる既習外国語が、日本語のみに依存しているという現状をあげることができる。つまり、かつて、初めて英語を学ぶ際に苦労した日本語とのギャップを再度、ドイツ語において味わわなければならないことにある。しかし、既習外国語である英語を用いて、ドイツ語・英語双方の共通点と相違点を対照させながら説明すれば、日本語のみを用いてドイツ語を説明するよりも、容易に理解できる。英独比較の教授法は何も新しいことではないが、既習外国語の学習パターンを、英独の比較の形で取り入れることの効果は大きい。つまり、英文法の形式的説明に受講者は慣れているので、その思考回路をドイツ語理解に発展的に応用することは有意義である。従来の英語学習は実践的ではないという指摘もあるが、既習外国語の形式に則って、対照させつつ教えることは、より深い理解を促すであろう。特に、学期完結という短期に理解するためには、既習外国語の習得で培った思考パターンを利用することは、より一層、効果が期待できる。

動詞の人称変化の規則を身に付けるには、ドイツ語の場合、語幹という概念が非常に重要であり、この概念なしに語尾変化は習得できないことを、英独の比較対照を通じて、明確にすることが重要である。英語にもドイツ語にも不定形が存在し、英語の「原形」と呼ばれている不定形とドイツ語の不定形は決定的に異なっていて、英語においては原形＝語幹という図式が成り立つのに対し、ドイツ語においては不定形語尾の en をとった lern が語幹ということになることを、3人称単数の s 以外の人称変化語尾を失った英語と比較しながら説明すれば、一層の理解が得られる筈である。

2. 定/不定冠詞(類)と名詞の格変化, 名詞の複数形動詞の現在人称変化⁽²⁾について

ドイツ語の名詞の特徴として、単数形において男性名詞, 女性名詞, 中性名詞の3性がすべての名詞に存在することを認識させる。各名詞の性に応じた定冠詞 (der, die, das) と不定冠詞 (ein, eine, ein) があることを、また性そのものは自然の性と文法上の性があることを指摘し、かつ例示する必要(例: Vater, Mutter, Kind / Tisch, Tür, Fenster 等)がある。さらに定冠詞と不定冠詞の用語の解説と基本的な用法を英語と比較しながら指導するのも効果的である。毎年英語の the や a, an の文法用語を熟知しない受講生も散見されるからである。

定冠詞類と不定冠詞類は、その用語が示す通り定冠詞と不定冠詞がその基礎にあることは言うまでもない。従って、定/不定冠詞の格変化を把握した上で指導させる必要がある。定冠詞類については、定冠詞との比較の上で、両者の共通点と相違点(中性 1/4 格)に言及する必要がある。不定冠詞類についても、不定冠詞との比較の上で、両者の共通点と

相違点（男性 1 格，中性 1 / 4 格）に言及する必要がある。

名詞の格変化は，先に例示した単語を用いた基本的な例文の中での格と格変化の解説が必要である。格変化の指導に，従来から導入されている日本語の助詞（は / が，の，に，を）との比較は効果的であるが，これは格変化の考え方の一例として受講生に強調する必要がある。fragen, helfen 等の動詞，次課で登場する前置詞等は必ずしも日本語の助詞との関連性はないからである。尚，独和辞典の使用方法についても 2 格，複数形，男性弱変化名詞等との兼ね合いから言及する必要がある。その際，Herz や Christus 等の不規則な単語の変化に触れてみるのも一案である。

名詞の複数形は，基本的な 同尾式 ER 式 E 式 N 式 S 式を提示する。複数形は英語に通じた受講生には問題はない。ただ，複数形で用いられる定冠詞付きの複数名詞とその格変化と用法，無冠詞で用いられる複数名詞とその格変化と用法の基本的な解説は必要である。特に，複数 3 格で語尾に新たに n を付加するものと付加しないものがあるためその解説も必要である。

動詞の現在人称変化(2)は，基本的には 2 人称（親称）単数及び 3 人称単数において語幹が母音変化するものである。fährst / fährt < fahren, sprichst / spricht < sprechen, siehst / sieht < sehen 等の頻度数の高い動詞を提示する。基本的な人称変化の訓練後，これらの単語を用いた簡単な会話を導入すると効果的である。尚，1 人称単数でも不規則な変化をする動詞 weiß < wissen も指摘する必要がある。

3．人称代名詞，前置詞，命令法，再帰動詞について

人称代名詞については，まず主語として用いられる 1 格を，動詞の人称変化の中できちんと認識させなければならない。英語と混同したり，綴りがあいまいなままの受講者が毎年，各クラスに数名は見受けられるからである。

従来の通年型授業においては，前置詞は 2 格支配， 3 格支配， 4 格支配， 3・4 格支配の 4 グループの前置詞を，まずそれらの含まれる例文とともに提示しつつ学習する方法が踏襲されてきた。しかし現今の学期完結型の授業形態の中では，何より時間数が極端に制限されているので，前置詞が文章全体の中でどのような表現能力や機能を備えているのかをまず簡潔に説明し，それを具体的に，日常生活の様々な局面において，比較的使用頻度の高い例えば，auf, aus, in, mit, von, などの前置詞を含む例文を使用することによって実証し，検証する。それによって前置詞のもつ基本的な働きが一通りは理解されるであろう。なかでも 3・4 格支配の前置詞のひとつであるドイツ語の in については，英語とも共通するので，in と into の明確な区別のある英語との比較検討を行えば，その相互関係がより鮮明に解明されるはずである。その上でなら，それぞれの名詞や人称代名詞との関連においてもまた同様の対応が可能となる。

命令法については，ほとんど語形変化を伴うことのない Sie に対する形をまず示し，sagen, schreiben, trinken, sprechen 等の身近な命令表現に使用される動詞と組み合わせ受講者に行わせ，その後さらに du と ihr に対する形式も存在することを提示すれば，2 人称の敬称と親称という相違にも自ずと注意が向けられることになり，二重の効果が期待される。

われわれ日本人にはなかなか馴染みにくい再帰表現については，sich freuen や sich

setzen)のような日常よく使われる動詞とその例文を使用して説明し、英語でも同様の oneself や themselves 等の再帰代名詞を伴う再帰表現との関連にも言及すれば、より一層、理解が深まる筈である。

4. 話法の助動詞、未来について

動詞本来の表現上の機能が、事実をただ事実としてのみ述べる客観的な働きを持つものに対して、話法の助動詞が組み合わされると、動詞は表現者の意思や願望などを述べる主観的な働きに向きを変えることが出来ることを強調することは大切である。

また、完了時称などの助動詞が専ら文の形の上で動詞を助ける助動詞であるのに対して、同じ助動詞でも、話法の助動詞は意味の上で動詞を助ける(話法の)ものであることを、説明する必要がある。

具体的に話法の助動詞を理解するには英語の助動詞 can, must, will などを利用するのが有効である。これらの語はドイツ語の können (kann), müssen (must), wollen (will) にスペルの上で対応するので、例えば、He can play tennis. と Er kann Tennis spielen. などの簡単な例文はほとんど抵抗なく英語とドイツ語を比較することが出来る。このような例文を用いると助動詞と動詞の語順が英文とドイツ文とは異なること、そしてドイツ文では助動詞と動詞とで枠を作ること、即ち、ドイツ文における枠構造を説明するのに非常に有効である。

未来形に関しては、werden が時称を示す助動詞であり、動詞と共に枠を構成することをここでもおさえておく必要がある。また、未来形が純粹な未来の事柄を表すよりも、一人称、三人称では、弱い意志や推量を表す話法的な意味で用いられる場合が多いということは、当然、語られるべきである。

5. 動詞の三基本形、分離・非分離動詞、過去の人称変化について

動詞の三基本形を扱うに当たって、どのような単語を用いるかという選択は、先ず、何よりも重要であろう。勿論、これは、動詞に限らず、全ての事項に言えることである。

ドイツ語の授業を通して、単に、語学の習得のみならず、広く、人生について考えるヒントを得る機会ともなればという、謂わば、願望をとも言うべきものがある。

動詞については、人間の営為にとって、基本的な問題である衣、食、住に関わる動詞は欠かせない。ここでは、tragen, anziehen, ausziehen, essen, trinken, wohnen, auswandern 等の動詞を用いる。

それに加えて、何よりも外国語の学習にとって不可欠な、読み、書き、話し、聞くことに関連する動詞も、文化的な営みの一つとして必要であり、ここでは、lesen, schreiben, sprechen, hören を動詞として用いる。

ドイツ語の「行く」ことが、語源的に「見出す」ことと同義であったように、語学の学習においても、果敢に、行動的に、未知の世界へ分け入って行くことが必要であり、それがひいては、新たなものの発見に繋がっている。語学の学習を通して、新たな地平が開け、新しいものを見出す喜びが齎されることを、ドイツ語の授業を通して、共に、享受できる筈であり、gehen, finden も、動詞として加えておく。

更には、論理的思考力を涵養する、考えることを巡る動詞も加えて、学生たちの知的好

奇心に応え得るような glauben, meinen, diskutieren, fragen, antworten も必要である。

それに加えて、ドイツ語の「考える」ことが、「感謝する」とことと語源的に同義語であったということを思い、理性のみならず、感性を育む糧ともなるような、究極的には、真善美に深く関わる動詞をも包括して denken, danken, sehen, empfinden, lieben など必要である。

動詞の三基本形における、規則的なものと、不規則なものがあることは、英語と同じであり、左程、問題はないが、不規則動詞には、強変化と混合変化という二つのタイプがあることを、事例に則して、説明する必要がある。

分離・非分離動詞は、基礎となる動詞に、前綴りが付けられて、複合動詞となっていることを、平易に説き明かす必要がある。

過去の人称変化には、動詞を吟味し、特に、ドイツ事情に鑑みて、東西に分裂していたドイツが、再統一されたというような、歴史的な事実に関わる動詞を用いて、teilen, wiedervereinigen などの動詞は、極めて有益である。

6．現在完了について

ドイツ語の現在完了形では、英語とは異なって、過去時制と完了時制の両方を表すこと、haben + ……過去分詞と、sein + ……過去分詞の両者が存在することを、簡潔に説明する必要がある。その際、ドイツ語の現在完了形の一義的な意味は過去時称であって、英語とは異なり、明確な過去を表す副詞とともに用いることが可能であることに言及することも大切である。それに加えて、英語の完了形は have を用いるのに対し、ドイツ語では haben 支配の動詞と sein 支配の動詞があり、sein 支配の動詞は、場所の移動を表す動詞・状態の変化を表す動詞・sein, bleiben, begegnen などであり、英独の対照を通じて英語とドイツ語の完了形の違いに触れて、既習外国語である英語をドイツ語に置き換えたとき、どのように置き換えられるのかということを説明することは、理解を円滑にするものであろう。

7．接続詞、zu 不定詞について

接続詞の用法として、並列接続詞 従属接続詞 副詞的接続詞があることを例文を通して提示する。これらの接続詞で強調すべき点は、定形（定動詞）の位置である。その為、定形正置、定形後置、定形倒置の基本的な考えを認識させる必要がある。特に主文 + 副文、副文 + 主文との関係における定形の位置は、英語にはないドイツ語の大きな特徴であることを強調することが必要である。この点に関してよく受講生がおかすミスを例示してみる。

（主文 + 副文）

誤： Er kam zu spät, weil er hatte eine Panne.

正： Er kam zu spät, weil er eine Panne hatte.

（副文 + 主文）

誤： Weil er hatte eine Panne, er kam zu spät.

誤： Weil er eine Panne hatte, er kam zu spät.

正： Weil er eine Panne hatte, kam er zu spät.

副文内の定形の位置は常に変わらないが、主文内の動詞は副文が先頭に来ると、認容文

等は例外として主語と動詞が倒置されることを強調すべきである。ドイツ語では主語以外の文の要素（語，句，節又は副文）が先頭に来ると，定形倒置（定形第2の原則）になることを再認識させることが重要である。

zu 不定詞については，英語にも同様の単元（to 不定詞）が存在するため，さほどの困難は生じない。従って，この単元では独英を比較してその共通点と相違点を浮き彫りにすることも一案である。特に相違点として zu + 不定形（不定詞）の例として，zu steigen, einzusteigen（分離動詞），zu besteigen（非分離動詞）等，また句としては nach Deutschland zu fahren（to go to Germany）等を解説後，基本的な用法，即ち，主語，目的語，付加語（形容詞的用法），um（...）zu...，ohne（...）zu...，statt（...）zu... を文例を通して採り上げる必要がある。

最後に，限られた時間の中であれ，初級ドイツ語といえども異文化に対する受講者の知的好奇心に，質実ともに合致した授業になるように心がけなければならない。

8．形容詞の格変化，形容詞の比較，比較の用法，es の用法について

形容詞の用法として，はじめに述語的用法，付加語的用法，副詞的用法，最後に名詞的用法があることをまず提示する。なかでも付加語的用法としての形容詞には名詞の格を表わす語尾が付くことを理解させるのは，初めてドイツ語にふれる受講者にはかなりの困難が付きまとう。それ故に，通常行われてきた 弱変化（定冠詞[類] + 形容詞 + 名詞），混合変化（不定冠詞[類] + 形容詞 + 名詞），強変化（形容詞 + 名詞）の分類は最初からは示さずに，まず付加語的用法の含まれる例文の中から，純粋な形容詞はどの部分かを見つけさせる作業を行わせる。教師のアドバイスや辞書などを参考にしながら，次第にそれぞれの語尾の部分が正確に分離され，そこではじめて日本語や英語には見られない名詞の格を示す補助的な働きとしての語尾の持つ意義が認識されるのである。

またドイツ語の形容詞は形を変えることなく，そのままの形で副詞としても使用されることも重要なポイントとして付け加えておかなければならない。

形容詞の比較，及び比較の用法については，導入として英語との比較対照から始めればスムーズな理解が得られる。比較級や最高級における付加語的用法については，語尾変化に置ける混乱を出来るだけ回避する上からも，その必要性の度合いに応じて採り上げるべきであろう。それよりもむしろ，so + 原級 + wie... や，比較級 + als... などのような英語でも馴染みのある述語的用法に力を注ぎ，基礎的な表現力養成を目指したい。

非人称 es の用法については，英語の it を用いた同種表現を援用して，通常の ich, du といった人称とは異なることをまず認識させる。また常に es を主語とするこの表現は，3人称単数形のみであることも是非とも指摘されなければならない。具体的には，regnen, schneien などの動詞を用いた自然現象の表現や，frieren, grauen などの動詞によって表現される，人間の生理・心理現象表現，さらには es を用いた特殊慣用表現として定着している，In diesem Fluss gibt es viele Fische. Wie geht es Ihnen? などの用法は特に重要であり，一層の注意を向けさせるべきである。

9．関係代名詞，受動態について

定関係代名詞は，定冠詞の格変化とよく似ているので，定冠詞の後ろの名詞が省略され

た形といった説明から入るのが分かりやすい。

例えば Der Mann heißt Schmidt. Der Mann kommt aus Deutschland を関係代名詞を使って一つの文にする、といった練習は、関係代名詞の先行詞をもう一度確認する上でも、また、ドイツ語の関係代名詞が定冠詞と似た変化をすることを学ぶ上でもかなり有効である。勿論、文章構成上、ドイツ語文は関係代名詞と定動詞（定形）とで枠を構成することの説明は不可欠である。

不定関係代名詞を学習するには、疑問代名詞を使った例文と対比させることは能率的である。それぞれの例文において定動詞（定形）の位置の違いを指摘し、関係代名詞の場合には、やはり定動詞が後置され、枠構造になることを説明すれば理解し易い。

受動態では werden が助動詞として用いられるので、既に学習済みの werden の用法、即ち、動詞としての用法、未来の助動詞としての用法を、簡単であってもここで再認識する必要がある。これら二つと未来の werden の三つの用法が整理されれば、受動態の文型を理解する上でも有益だからである。

受動態の時称の未来完了については、文法的にその形を作ることは可能ではあるが、実際に使われることはないので触れる必要はない。

sein を用いた状態受動は動詞の過去分詞を sein の補語として扱い、強いて状態受動を採り上げない教授法もあるが、werden を使った動作受動を、逆に、よりよく理解する為にも、状態受動の学習は有効である。

10. 接続法について

現今の、限られた語学の授業時間の中で、これまでと同様に初級文法の項目を、すべて網羅して教えることは不可能であり、その必要はないとして、接続法のような厄介なものは、初級文法では取り上げないやり方も、現実的な対応策として一理ある。しかし、初級文法の学習において、出来るだけ項目を削って、ほんの当座、自らが発信するだけのために、最小限、必要な文法事項だけ学べばよいというのでは、言葉の内包する文化的な側面への洞察が見失われてしまう。それは、余りにも安きに流れるものであり、語学教育そのものを形骸化させてしまう虞なしとしない。安易さのみを求めるところには、知ることの喜びは生まれてこない。言葉の学習とは、その背後に秘められている文化理解であり、言葉を通して、それを話している人々の暮らし振りを窺い知ることができる。異なった国々の人々が、共に生きることを必定とされている現代にあって、限られた文法項目だけでは、交流一つをとっても、余りにも不十分である。初級文法の項目は、ここでいう接続法も含めて、幅広く、一通り概観する必要がある。

接続法は、会話の中では、特に möchte 等が、外交話法として、頻繁に使用されるところから、話すことに主眼を置いて編集されている教材では、文法的に説明されることなく、かなり、早い時点で学習されるケースが多い。それは、確かに、会話力の充実には通じはするが、初級ドイツ語の文法を概観するという観点から言えば、学習者に少なからず、混乱を及ぼしている。従来、初級ドイツ語文法がそうであったように、直説法の流れの中で、文法事項を一通り終えてから、最後に接続法を学ぶことこそ、全体的に、整然としていて、理解し易く、妥当である。

接続法という名称の由来は、本来、副文に用いられて、この副文を主文に接続する話法

であったことの説明は必要である。接続法には、不定形から導きだされた第一式と、過去形から導きだされた第二式の二つがあること。第一式には、要求話法と間接話法があり、第二式は非現実話法、外交話法があることを、簡単な事例に則して説き明かす必要がある。

最後の10課において、接続法の意味する願望や想像の表現を通して、各自、これ迄の学習を振り返り、その総括の上に立って、更に、今後のドイツ語との関わり方を展望することは意義あることである。ややもすると、初級ドイツ語の学習が、通り一遍のものとなって、ただ難しかったという印象に終始してしまい勝ちであるが、真摯な気持ちで、これ迄の自分とドイツ語とのあり方を振り返ることは大切なことである。

・ 結語

本稿では、学期完結制度におけるドイツ語教材のあり方を巡って、個々の文法項目に則して、専ら、方法論としての側面から論じてきた。

授業において大切なことは、伝えられるべき知識が受講生の胸内に、徐々に浸透していった、それがじっくりと時間をかけて醗酵し、遂には、知ることの喜びに至ることにある。その為には、何よりも、教える側が、ひたすら、忍耐強く、じっと「待つこと」に徹する必要があることは言うを俟たない。瞬時に、時間、空間を超えて交流を可能ならしめている現代の情報社会にあっては、より速いことを目指す余り、「待つこと」は、等閑視され勝ちである。しかし、「待つこと」なくして、真の出会いはいり得ない。「待て、暫し！」と歌ったドイツの詩人の聲に倣って、今一度、「待つこと」のもつ意義に想いを潜めることこそ大切である。ドイツ語の授業が、「待つこと」に徹して、人生における、掛け替えのない出会いの場となるべく、教材研究をもとに、教育実践のあり方を、更に模索して行かなければならない。

参考文献

Gerhard Helbig, Joachim Buscha : Deutsche Grammatik, Verlag Enzyklopadie 1972

Wolf Friederich : Moderne Deutsche Idiomatik, Max Hueber Verlag 1976

Duden, Bd. 7, Dudenverlag 1963

Duden, Bd. 10, Dudenverlag 1963

橋本文夫：詳解ドイツ大文法 三修社 1970

桜井和子：ドイツ広文典 第三書房 1975

(執筆分担 1, 6 野口健, 2, 7 前田智, 3, 8 工藤眞一, 4, 9 橋本不二男, 5, 10 八木博)